

山花開いて錦に似たり

3度目の緊急事態宣言下でも、師匠のはからいでお茶の稽古を続けています。時間を区切って参加人数を3名以内に限定し、換気を徹底するという感染予防策を講じての稽古です。もちろん濃茶の回し飲みは、今年の2月以来行っていません。

すこし前の稽古には、山花開似錦（山花開いて錦に似たり）の掛軸が掲げられていました。山には花が満ちあふれてまるで錦のようだ、というのです。出典である中国の古典『碧眼録』は、この後に「澗水湛如藍」（澗水、湛えて藍のごとし）が続きます。

禅語の由来はおおむね以下のとおりです。

人間はもとより形あるものはすべては滅びゆく存在である。その移ろう世の中で永遠に変わらぬ絶対的真理はどのようなもののでしょうか、と修行僧は禅師に尋ねました。これに対して師は「山花開似錦 澗水湛如藍」と答えます。

いつかは散る花、いつかは枯渇する川が、いま疑いもなく輝いている様子を指し示すことで、禅師は永久不変なものを求める修行僧の、問いの立て方そのものが間違いであることを諭しました。

普通、そう解されるところです。

禅の公案とは、禅師と修行僧との間で交わされる教育的な問答なので、どうしても禅の心構えはかくあるべしという教えが凝縮されるのだと思います。しかし、そこに教育者の自尊心が前面に出て、かえって禅師自身の煩惱が見え隠れするようにも感じます。

弟子の誤りを指摘したのだというより、「そんなことより今とらわれていることから目を転じてごらん」と促したのだととらえたほうが、我々にとって心の糧になるのではないかと、そう思います。一年以上コロナ禍で窮屈な思いをしていると、本当に心に響く言葉に変換して、ものを考える癖がついてしまいます。

■ 自然に同化する言葉

いまある美しさに視点を促し、それに同一化しようと語りかける禅語は、ほかにも多く見られます。例えば、次のような言葉たち。

青山元不動（青山元動かず）

白雲自去来（白雲自ずから去来す）

山は巖然として動きはしないが、

動いてやまない雲によって変幻自在の不動の姿を見せている。（『五灯会元』）

行到水窮処 (行いて到る水の窮まる処)

坐看雲起時 (坐して見る雲の起こる時)

ぶらぶらと、流れの尽きるあたりまで歩いて行き、
腰を下して雲の湧くのを無心に眺めてみよう。(王維『終南別業』)

泉声中夜後 (泉声中夜の後)

山色夕陽時 (山色夕陽の時)

泉の音は、深夜に最も互え響き、
山色は夕陽に映じた時が最も麗わしい。(虚堂智愚『虚堂録』)

種明かしをすると、上記の禅語はいずれも、かつてクレイジーキャッツの植木等さんが歌った「だまって俺について来い」の、次の歌詞に響き合うものを選びました。

「見ろよ青い空 白い雲」

「見ろよ波の果て 水平線」

「見ろよ萌えている あかね雲」

それぞれ、1番、2番、3番の歌詞のサビの部分で、「そのうち何とかなるだろう」と続いてオチになります。

50歳代以下の方々には何のことやら見当もつかないかもしれませんが、冒頭の禅語から想起したのが、あの植木等さんの朗々とした歌声でした。

■ 開き直りの明るさ

植木さんはもともと名古屋の住職の息子で、東京のお寺に小僧修行をするために上京した人なので、歌声にも御利益があるのかもしれませんが、そして、つい忘れがちなのですが、クレイジーキャッツはジャズバンドで、植木さんの本職はギタリストであり歌手なのです。本人は生真面目な性格で、「スーダラ節」で吹っ切れるまでに、無責任男の役作りには相当苦労したと、何かに書いてありました。

開き直りのおおらかさ、起死回生を生み出す力強さは、昭和のあの時代の通奏低音なのかもしれません。

ここまで書いてきて、中世ヨーロッパの『デカメロン』が、ペスト禍の逼塞状況のなかで生まれた、開き直りの明るさであって、これがやがてルネッサンスの開花をもたらしたことを思い出しました。

昭和は遠くなりにつれ、昭和は古臭いと馬鹿にしたり、単に懐古するだけのものではなく、今だからこそ学べる何かがあるのではないかと考えるのです。

(所長 瀬戸 英晴)